

一 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを書きなさい。

- ① 絵画コンクールで入選し、フクシヨウに絵の具をもらった。
- ② 昔からのカンシユウにならう。
- ③ 二、三步、後ろヘシリゾク。
- ④ 試合の後半からケイセイが逆転した。
- ⑤ 税金は国や地方のザイゲンとなっている。
- ⑥ 幼い子どもの面どうをみる。
- ⑦ 遠い日の思い出が脳裏をよぎる。
- ⑧ 県大会に照準を合わせた練習を行う。
- ⑨ なるべく残飯が出ないようにする。
- ⑩ パーティに盛装で出席する。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(注意) 字数制限のある問題は、句読点や記号なども、一字として数えます。

まりもが小学五年生の秋のことだった。
夜、風呂を済ませて布団を敷いていると、蓮司が思い出したように言
った。

「そういえば、お前のクラスに石本博美って子いるべ」

まりもの心臓が、ざわっとした。

「いるよ」

どうして? と用心深く訊く。

「先週から父ちゃん、新しい現場になったつってたべ? 今日わかっ
ただけど、その家、石本さんちだったんだわ。増築して二世帯にする
とかでさ、俺が足場組んでたらちようとお母さんと目が合って、『うそ、
岩館さん?』なんつってびっくりされちゃったよ」

「……ふうん」

「ほれ、これまでも何回か、保護者会とかで会ってっからさ」

「……そうだね」

「なんだあ? お前」蓮司は、数き終わった布団の上にあぐらをかいた。
「ノリが悪いな。もしかして、石本さんとはあんまし仲良くないのか」
「べつに。……っていうか、まあ、どっちかっていえばね」まりもはし
ぶしぶ言った。「とくべつ仲が悪いとかじゃないけど、あんまり遊ばな
い」

嘘ではない。だが、①事実とも少し違っていた。

四年生から五年生に上がる時に、クラス替えがあった。せっかく仲良
くなった友だちと離ればなれになったのも悲しかったが、まりもにとっ
てさらに憂鬱だったのは、新しく担任となった四十過ぎの女の先生がど
うにも好きになれないこと、そして、石本博美とまた同じクラスになっ

てしまったことだった。学校生活においては、出席番号が隣り合った者
同士が接点を持たずにいるなど不可能だ。本音を言えば学校じゅうでい
ちばん喋りたくない相手と、このさき小学校を卒業するまでの二年間、
また何かにつけて行動を共にしなくてはならないと思うだけで苦痛だ
った。

黙って布団に滑りこんだまりものそばへ、蓮司が何か言いたげに寄っ
てくる。隣に寝そべると、肘をついて頭を支え、まりもの顔を覗きこん
だ。

「なした。何があった。父ちゃんに話してみな」

「べつに。なんもないよ」

「なんもないわけねえべ。お前が『べつに』って言う時はたいてい何か
ある時だべや」

②驚いた顔のまりもに向かって、蓮司はにやりと歯を見せた。

「だてに十年も、お前の父ちゃんをやってねえよ」

まりもは思わずふきだした。布団を鼻の下まで引きあげ、父親と一緒
になつてくすくす笑う。

「したけど父ちゃん、友だちの悪口はいけないうって言ってたしよや」

「いい。今だけは許す」

「ほんとに?」

「ああ。なんにでも例外ってもんはあるからな」

いいから話してみる、となおも促され、まりもはようやく言った。

「石本さんってね、すごくイジワルなんだわ」

「ほう。何した?」

「四年生のとき、高橋奈緒ちゃんっていたしよ。覚えてる?」

「ああ、いたなあ。たしか途中で旭川かどっかへ転校してた……」

お前、けっこう仲良かったべ」

「うん」

「あの子がどうした」

「奈緒ちゃんね、石本さんにいじめられてたの。石本さんと仲よしの人が三人くらいいるんだけど、最初は体育のドッジボールの時だったかな、石本さんが、自分のチームが負けたのは奈緒ちゃんがちゃんとやんなかったせいだって言いだして、それから急にムシとかするようになって……。奈緒ちゃん、たしかにウインドーシンケーはちょっとあれだけど、それでも一生けんめい頑張ったのにさ。それから、マラソンの時なんか奈緒ちゃんが途中でおなか痛くなると、石本さんたちがみんなしてあんなのうそついてサボってるにきまつてるとかコソコソ言うし、先生に指されてうまく答えられないでいると、わざと聞こえるように笑うし。週番で給食のパンとか配ったりしても、『やだー、タカハシキンがうつるうー』って、わざと受け取らなかつたりさ。奈緒ちゃん、隠れて泣いてたこともあったんだ。そのうちに転校が決まって引越していつちゃったんだけど……」

③ あの時のことを思い出すと、胸がぎゅっと押されたように痛む。

「もしかして、転校はそいつらのせいだったんか」

まりもは首を横にふった。

「お父さんがテンキンするからだって言ってた。したけど、ほっとしたって」

「え？」

「あたしがね、『奈緒ちゃんとはなればなれになるのさびしいよ』って言ったのね。したら奈緒ちゃん、『それはあたしもおんなじだけど、でも転校が決まってものごくほっとしたんだあ』って。『ごめんね、まりもちゃん、こんなこと言ってごめんね』ってあやまれちゃってさ。それであたし……」

唇を結び、まりもは、思いきって言った。

「あたし、決めたんだわ。石本さんのことキライになるって」

部屋の中がしんとする。

「——そうか」

と、蓮司が言った。

「決めたってだけで、石本さんには言っていないけどね」

「そうか。うん」

「したけど、ほんとはすっごくコーカイしてるの」

「後悔？」

まりもはうなずいた。布団の中に鼻先を埋める。

「あたし、ずっと奈緒ちゃんの味方していっしょにいたつもりだけど、石本さんたちに、本気で『やめなよ』って注意しなかった。なんであいうこと言うんだろうっていつも思ってたけど、なんとなく、冗談のひどいのって感じだったし、けんかになるのもめんどくさかったから、バカな人はほっとけばいいしよ、って。でも……奈緒ちゃんにしてみたらさ。転校が決まってあんなにほっとするくらい、あのクラスにいるのがイヤだったわけだし」

布団のふちを両手できゅっとつかみ、天井を見あげながらひと息に話して、まりもはそれきり口をつぐんだ。

やがて、蓮司の手がのびてきて、前髪をかき上げてくれた。露わになった額に、熱を測る時のように、大きなのひらが置かれる。湿っていて、あたたかかった。

こみあげてくるものを我慢しながら上目遣いに見やると、蓮司は、苦笑いとも何ともつかない顔で、今かき上げてくれたばかりの髪をぐしゃぐしゃにかき混ぜた。

④ ひどつ、勉強したってことだよ。な？」

まりもは目を伏せ、掛け布団のふちを見つめた。ややあって小さくうなずく。

「もし今度またそういうことがあったら、そんな時は、同じ後悔をしない

ような道を選べばいい。もしかすると、そうしたらそうしたでやっぱり後悔することがあるかもしれないねえしな」

「……どういふこと？」

「片っぱのやり方が間違ってたからって、もう片っぱを選べば絶対正しいかっていえば、それがそうとも限らねえってことだよ」

「……よくわかんない」

「はは、そりやそうだ」蓮司は笑った。「わかるわけねえわな。いいんだ、それで」

「よくないよ」

「いいんだって。まりもは、まりものまんまでいりゃあ、それでいいんだって。父ちゃんは、まりものおとしりしたところが好きだ。気が優しくって、人と争ったりすんのが苦手で、そのくせ曲がったことは許せねえところもな。だからな、なーんも焦る必要はねえ。まりもはまりものペースで、のーんびりやれ、のーんびり」

そんな呑気な、と思いつながら、まりもは強ばっていた体からふっと力が抜けるような心地がした。友だちのために何もできなかった後悔は消えていなかったが、父に打ち明けたことで、心の重苦しさはほんの少しだけ減った気がした。

「父ちゃん」

「うん？」

⑤ 「ほんとだね」

「何が」

「だてにあたしの父ちゃんじゃないね」

笑いだした蓮司が、またしてもまりもの髪をこちゃ混ぜにした。

(中略)

うきうきと走って学校に着き、おはよう、と教室に駆け込む。ランドセルを下ろしたまりもは、けれど、ふと異変を感じて手を止めた。

⑥ 静かすぎる

あたりを見回すと、教室にいる誰もが、動きを止めてまりもを見ていた。誰も口をきかない。まるで、時間の止まった世界に迷い込んでしまったかのようだ。心臓が、どくんどくと音をたて始める。

と、後ろから声が響いた。

「あー、岩館さんだー。おはよう」

ふり向くより先に、まりもは、これからとてもいやなことが始まるのをさとしていた。

「今ねえ、みんなにも教えてあげてたんだけど」

石本博美は聞こえよがしに言った。例によって後ろに〈自分〉を三人従えている。

「岩館さんさ、知ってる？ ここんとこ、あんたのお父さん、あたしんちの工事してるんだわ」

まりもは、息を吸いこんだ。

「だから、何」

「あー、知ってるんだあ。あたし昨日、学校から帰ってびっくりしちゃった。きつたない服着た人が、『こんちはー』なんてこっちに手えふるから誰かと思ったら、岩館さんのお父さんなんだもん」

まりもの背後で誰かが、

「大工さん？」

「わかんない」

などと囁きあっている。

「大工さんじゃないよ、うちのママが言ってた。大工さんはえらいけど、岩館さんのお父さんは簡単な力仕事しかやらない人なんだって」

「ちがうよー」

まりもは大声で言った。

「全然ちがう。大工さんだけがえらいんじゃないよ。父ちゃんの仕事は

トビっていつて、大工さんにはできない、あぶない仕事をするんだよ。父ちゃんたちがいなかったら大工さんは家なんか作れないんだから！」

石本博美が、わざとらしく身をよじって笑いだした。

「やあだあ、『父ちゃん』だって！」

へんなのー、田舎の子みたーい、と仲良しグループがそれに同調する。

まりもは⑦ぐつと詰まった。蓮司が自分で自分のことをそう呼ぶから、家族みんなもあだ名のように呼んでいるだけなのに。

「前の授業参観の時とかもさ」と、博美が勝ち誇って続ける。「岩館さんのお父さん、遅刻してあとから入ってきたしよ。そのくせやたらと調子いいから、へんな人ーって思ってたけど、やっぱりねって感じ。昨日も、泥とかペンキだらけの服着てさ。きつたなーい」

まりもはこぶしを握りしめた。てのひらに爪が食いこむ。

(村山由佳『天翔る』)

問1——線部①「事実とも少し違っていた」とありますが、まりもにとって石本博美はどのような存在なのですか。本文中より十五字以上、二十字以内で書きぬきなさい。

問2——線部②「驚いた顔のまりも」とありますが、まりもが驚いた理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア つまらないなやみを、父が聞いてくれると思わなかったから。
イ まりもに何かなやみがあることを、父が見ぬいていたから。
ウ まりもの石本博美への感情を、父がうすうす察していたから。
エ まりもが友だちの悪口を言うことを、父がわかっていたから。

問6——線部⑥「静かすぎる」とありますが、教室が異様に静かになった理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 石本博美が話し始めるだろうと思い、みんな口をつぐんだから。
イ まりもと石本博美の対決を前に、緊張感がみなぎっていたから。
ウ さっきまで話題に上っていた当の本人が教室に入ってきたから。
エ クラスのみんなが、まりもに対して敵意をいだいていたから。

問7——線部⑦「ぐつと詰まった」とありますが、これはどのような様子ですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉の暴力に追い詰められている様子。
イ 相手の挑発に、ぐつとこらえている様子。
ウ 言い返すことができないでいる様子。
エ 恥ずかしくて顔を上げられない様子。

問8——線部⑧「まりもはこぶしを握りしめた。てのひらに爪が食いこむ。」とありますが、このときのまりもの気持ちを四十字以内で答えなさい。

問3——線部③「あの時のことを思い出すと、胸がぎゅっと押されたように痛む。」とありますが、まりもの胸が痛む理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 石本さんたちにいじめられたことで、奈緒ちゃんがどんなに苦しんでいたかと思うと、やりきれない気持ちになるから。

イ 奈緒ちゃんは石本さんたちによるいじめを苦にして、転校せざるを得なくなり、それは本当にひどいことだと思うから。

ウ いちばんの親友だった奈緒ちゃんが転校することになり、これからは自分一人がいじめられるのだと不安に思ったから。

エ 奈緒ちゃんが心底つらい気持ちでいたことがわからず、石本さんたちを止めようとしなかったことをくやんでいるから。

問4——線部④「ひとつ、勉強したってことだべや。」とありますが、父はまりもがどのようなことを勉強したと考えていますか。次の文の「」にあてはまる語句を本文中より十八字で書きぬきなさい。

奈緒ちゃんの一件で教訓を得たのだから、次に似たようなことが起きたら、「」ということ。

問5——線部⑤「ほんとだね」とありますが、まりもは父のどの言葉に対してこう言っているのですか。本文中より一つの会話をぬき出し、最初と最後の五字で答えなさい。ただし、「」を書く必要はありません。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(注意) 字数制限のある問題は、句読点や記号なども、一字として数えます。

1 「 」

現在、環境問題がさまざまな議論されています。一口に環境問題といっても、地球温暖化・オゾン層の破壊・熱帯林の減少・酸性雨・有機化合物や有毒金属による地球汚染など、多くの問題にわたっており、対策も個々の問題に応じて異なっています。逆に、原因はただ一つです。①人間の諸活動が、環境問題を引き起こしているからです。地上に人類が現れて以来、地球環境は汚染され続けてきたと極論を言う人もいます。実際、人類の手で多くの種が絶滅させられました。しかし、人類も自然に生まれてきた生物の一つですから、その活動が環境に影響を与えるのは必然なのかもしれません。

ただ、人類は生産活動を行うという点で他の生物とは異なった存在であり、自然では作り得ない物質を生産し、その大量消費を行うようになったのも事実です。その結果、人類の活動が地球の環境が許容できる能力と匹敵するほどのレベルに達しており、自然では浄化しきれない人工化合物があふれ、新しい生命体を作る試みすら始めています。人類は、意識しているかどうかは別として、環境を根本的に変えかねない事態を招いているのです。

かつては、「環境は無限」と考えられていました。つまり、環境の容量は人類の活動に比べて圧倒的に大きく、すべてを吸収処理してくれると思ってきたのです。だから、廃棄物を平気で海や空に捨て、森林を切り、海や湖を埋立て、ダムを造ってきました。しかし、環境が無限でないことを、さまざまな公害によって学んできました。また、陸にも海にも砂漠化が進み(海にも砂漠化が進み、海藻が枯れています)、自然の生産力が落ち始めています。確かに、このままの消費生活を続けると、

を考えることではないでしょうか。

3 「 」

環境問題を引き起こした原因の一つは、③現在の生産様式が自然の論理に合っていないことにあります。ある意味で、かんたんで楽なやり方しか採用してこなかったのです。

例えば、現在の生産方式の多くは、工場(プラント)を集中化し、巨大化した設備で大量生産を続けるという方法がとられています。その方が、生産効率が高く、省力化できる、つまり安上がりで大量に生産ができるという経済論理が優先されているのです。そのために、政府が基盤整備に投資を行い、それに合わせて輸送手段を集中し、都市へ人を集めるというふうに、社会構造まで含めて巨大化・集中化に*邁進しています。その結果、少量ならば自然の力で浄化できるのに、大量に工業排出物を放出するため、海や空気の汚染を深刻化させたのです。

工場を分散させ、小規模施設とすることが、まず第一歩です。それでは生産力が落ちると反論されそうですが、小規模でも同じ生産力を保つ研究が必要なのです。そのヒントは、④科学の技術化は、一通りだけではないという点にあります。むしろ、今までは大規模生産しか考えず、それに適した技術しか開発してこなかったといえるかもしれません。もうけるという経済論理が、科学技術の中身を決めてきた可能性がありま

す。「自然にやさしい科学」とは、従来とは異なった、小規模でも高い生産性を持つ原理や技術の発見という意味を込めています。

また、巨大化・集中化は「画一化」につながっています。全国いたるところで、同じ物が売られ、同じテレビ番組が流れ、同じビルが建ち並んでいます。画一化された文化の中で、画一化された生活を送り、画一化された製品に囲まれている結果が、大量消費構造を支えているのです。それぞれが、独自の生活スタイルをとり、固有な文化を生き、独特の生

地球の許容能力を越え、*カタストロフィーが起こるかもしれません。②人類の未来は、環境問題の危機をいかに乗り切るにかかっていると言っても過言ではないでしょう。二十一世紀は、まさにこの課題に直面する時代となるに違いありません。

2 「 」

この環境問題の原因は、無責任に大量生産・大量消費の社会構造にしまつた私たちの世代の責任であると考えています。自分たちは優雅で便利な生活を送りながら、その「借金」を子孫に押しつけているのですから。借金の最大の象徴は、原子力発電所から出る大量の放射性廃棄物でしょう。電氣を使って生活を楽しんでいるのは私たちですが、害にしかならない放射性廃棄物を一万年にわたって管理し続けねばならないのは、私たちの子孫なのです。あるいは、熱帯林を切つて大量の安い紙を使っているのは私たちであり、表土が流されて不毛の地となつてしまつた大陸や島に生きねばならないのは子孫たちなのです。環境問題は、すべてこのような構造をもっています。この点を考えれば、せめて子孫たちの負担を少しでも軽くするような手だてを打つていかねばなりません。

この地球環境の危機に対し、「原始時代のような生活に戻れ」という主張をする人がいます。大量消費が原因なので、それをやめればいいという単純な発想です。しかし、それは正しいのでしょうか。いったん獲得した知識や能力を捨てて、原始時代の不安な生活に戻るものなのでしょうか。生産力の低い生活に戻れば、どれほど多くの餓死者が出るのでしょうか。はたして誰が、それを命じることができるのでしょ

うか。たぶん、答えは、そんな知恵のない単純なものではないと思います。なすべきことは、現在の私たちの生き方を振り返り、いかなる価値観の変更が必要で、そのためには、科学がいかなる役目を果たすべきか

産様式をつくり出す、という価値観の転換が必要だと思っています。そのような「多様性」の中で生きるためには、どのようにして太陽や風や海流や地熱など自然のエネルギー利用を行うか、人工化合物でなく自然物を利用するかなど、やはり「環境にやさしい科学」が望まれることになるのです。

4 「 」

その可能性は、エレクトロニクス技術による「マイクロマシン」という、生物が採用している生体反応を利用するのに似た方式にあるかもしれません。虫は、あんなに小さな体なのに、実に*精巧な機能をもっています。A、蚊は、一センチにもならない体であるにもかかわらず、獲物を探すための三種のセンサー(二酸化炭素用II人の呼吸、赤外線用II人の体温、乳酸用II人の汗)、毛細血管の位置を探索超音波センサー、皮膚に穴を開けるノコギリ状のパイプと鋭い針の二重構造からなる*口吻、針の先端部が血管で止まるように血漿を検知するセンサーをもっています。もし、私たちが、これだけの機能をもつ機械を作ろうと思えば、非常に巨大でエネルギーを使う機械となってしまうでしょう。B、蚊は、それを見事に作り上げているのです。マイクロマシンは、そのような小型でエネルギーをあまり使わない生物機械を実現することをめざしています。ヒントは、電氣エネルギーを使って機械を動かすのではなく、生体反応をもつと利用することにあります。

C、原子一個一個を制御するナノテクノロジーも、新しい工学機械の可能性を拓くかもしれません。マイクロマシンやナノテクノロジーなどから、大量生産・大量消費とは異なった論理で生きる社会をめざす必要があると考えています。

5 「 」

電気エネルギーはクリーンで取り扱いやすいので、今や何もかも電気で動く機械が作られています。⑤「ここでも『画一化』が進んでいるのです。しかし、電気エネルギーの利用は、実におだが多いのです。まず、石油やウランから取り出された熱エネルギーを電気エネルギーへ変え、再び電気エネルギーを熱やモーターの運動に変えるという、二段階の変換を行っています。エネルギーを変換するたびに＊ロスがあり、本来使えるエネルギーの半分程度しか使っていません。また、原子力発電所は危険なので都市から離れた遠隔地に建設されており、長い距離を送電するための送電線や鉄塔などの設備建設が必要だし、送電中のロスもあります。しかし、現在の生産体制は電気エネルギー利用を前提として組み立てられており、それに適した技術しか開発されなかったのです。「自然にやさしい科学」とは、電気エネルギー＊一辺倒から、自然に密着したエネルギー利用の科学への転換を意味しています。

(池内了『科学の考え方・学び方』)

＊匹敵：比べてみて能力や価値などが同程度であること。

＊カタストロフィー：悲劇的な結末。終局。

＊適進：ひるまず、いちずに進むこと。

＊精巧：仕組みが細かく、よくできているさま。

＊口吻：口もと。口先。

＊ロス：そこない失うこと。

＊一辺倒：特定のものにかたよること。

問1 本文の1～5の「 」にあてはまる小見出しとして適当

なものを次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 「自然にやさしい科学」を

イ 生体反応を利用した技術

ウ 人類の活動が地球を破壊させる

エ 電気エネルギーからの脱却

オ 「借金」を子孫に押しつける

問2 — 線部①「人間の諸活動」とありますが、具体的にどのようなことを行ってきましたか。1の文章の中のことばを使って三十五字以内で答えなさい。

問3 — 線部②「人類の未来は、環境問題の危機をいかに乗り切るかにかかっている」とありますが、そのためにどのようなことが必要であると筆者は述べていますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 便利な生活を捨て、原始時代のような生活に戻ること。

イ 現在持っている知識や能力を一旦捨ててしまうこと。

ウ 大量消費をやめ、生産力の低い昔の生活に戻ること。

エ 価値観を変え、科学が果たすべき役目を考えること。

問4 — 線部③「現在の生産様式が自然の論理に合っていない」とありますが、これについて説明した次の文の「 」にあてはまることばを指定字数で書きぬきなさい。

「 二十一字 」に基づいた生産様式では、

「 十字 」量を超えた排出物が出てしまうということ。

問5 — 線部④「科学の技術化は、一通りだけではない」とありますが、どのような技術が望ましいと言えますか。適当なものを次のア～エの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 小規模でも高い生産性を持つことができるような技術。

イ 設備の巨大化・集中化を可能にする技術。

ウ 太陽や風などの自然エネルギーを利用する技術。

エ 生活、文化、製品の画一化を可能にする技術。

問6 A C にあてはまることばを次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア また イ ところが

ウ 例えば エ なぜなら

問7 — 線部⑤「ここでも『画一化』が進んでいる」とありますが、これとほぼ同じ内容を表した部分を、本文中から十字で書きぬきなさい。

問8 本文の内容と合っていないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 原子力発電所から出される放射性廃棄物は、一万年もの間、消えることがない。

イ 電気エネルギーの使用には、長い距離を送電するための設備が必要な場合がある。

ウ 人類は環境が有限であることに今も気づいておらず、汚染や破壊を続けている。

エ 蚊は、人から出される二酸化炭素や汗、人の体温を感じ取るセンサーを持っている。

国語解答用紙

受験番号

氏名

中学①一般

一

⑥		①	
幼 い	い		フク シヨウ
⑦		②	
脳 裏			カン シユウ
⑧		③	
照 準		く	シリ ゾ
⑨		④	
残 飯			ケイ セイ
⑩		⑤	
盛 装			ザイ ゲン

二

問 1

問 2

問 3

問 4

奈緒ちゃんの一件で教訓を得たのだから、次に似たようなことが起きたら、

としよう。

問 5

問 6

問 7

問 8

三

問 1

問 2

問 3

問 4

に基づいた生産様式では、

量を超えた排出物が出てしまうということ。

問 5

問 6

A

B

C

問 7

問 8